

29. 第19期・第20期の活動を振り返って*1

鈴木 康之*2

日本医学教育学会では4年ごとに代議員・理事選挙が行われ、理事は代議員会の承認のもと、2期4年務めることとなっている。19・20期は2015年夏に行われた選挙によって選出され、2016年7月（第48回大会、大阪医科大学）から2020年8月（第52回大会、鹿児島大学）まで活動した。この4年間は医学教育分野別認証の正式スタート（2017）、日野原重明名誉会長のご逝去（2017）、医学部不正入試問題（2018）、学会創立50周年（2019）¹⁾、そしてCOVID-19パンデミック（2020）と、様々な課題と節目の4年間であった。本稿では19・20期の活動を振り返り、今後への期待を述べたい。

教育指導者の育成

教育指導者の育成は本学会の根幹であり、様々な取り組みが行われてきた。医学教育者のためのワークショップ（富士研）は、1970年代からスタートしたわが国初の医学教育ワークショップで、19・20期はアウトカム基盤型教育をテーマに、医学教育専門家・業績FD委員会を中心となって実施した²⁾。近年は中堅の教育センター担当者の参加が増え、臨床研修病院からの参加が減少するなどの課題・ニーズの変化がある。2020年度はCOVID-19の影響から中止を余儀なくされたが、これを機会に今後のあり方について検討されることを期待したい。

医学教育専門家制度は2014年度から正式にスタートし、当初3年間は暫定制度（ポートフォリオ審査）として稼働していたが、2017年度からは講習会（2日間×3回）を受講し、ポートフォ

リオを提出することが認定要件となった。現在、認定者は181名にまで増加し、全国で活躍されていることは大変心強い。COVID-19の影響で、一時期、対面講習が中止されたが、21期新体制のもと、ウェブ講習が導入され再開できたことに感謝している。

国際交流とグローバルな医学教育の推進

国際化の中で、わが国の医学教育はどうあるべきか、今ほど意識される時代は無かったと言っても過言ではない。学会として国際交流の基盤作りと情報発信の充実が求められた4年間であった。国際化委員会ではインターナショナルセッションの充実を図り、海外参加者との交流が活性化した。また日韓交流、ベトナム・モンゴル・タイなどにおける医学教育プロジェクトへの参画³⁾、世界医学教育連盟（WFME）・西太平洋地区医学教育連盟（WPAME）との連携にも力を入れた。ヨーロッパ医学教育学会（AMEE）に毎年多数の会員が参加することが当たり前の時代になり、国際認証の一翼を担う日本医学教育評価機構（JACME）の活動にも多くの会員が貢献している。国際化の中で、いかにグローバルな医学教育を推進・発信していくか今後に期待したい。

包括的な委員会活動

各委員会活動の概要は本書の各章に譲るが、多忙な中、活動を推進していただいた委員各位に感謝したい。19・20期の委員会を構成するにあたっては、委員会の包括化を一つの方向性とした。その意図は、大局的・多様な視野で教育の現状を分析することで、新しい視点・改善のヒントが得られるのではないかという期待であった。これは「広く浅い」活動になってしまうリスクも孕んでいたが、卒前・卒後教育のシー

*1 Reflection on the 19th and 20th Terms of Japan Society for Medical Education

*2 Yasuyuki Suzuki, 第19期・第20期理事長、岐阜大学医学教育開発研究センター

ムレス化、プロフェッショナリズム・行動科学教育、医療専門職教育 COI 指針の策定など、一定の成果が得られ、多くの連載論文が機関誌「医学教育」に掲載された。今後も課題の性質に応じて、時には包括的に、また時にはプロジェクトベースに活動し、成果の発信と社会への還元を目指していただきたい。

卒後教育の充実

新医師臨床研修制度がスタートして約10年が経過した2016年当時、卒後教育関係者や研修病院のニーズに対し、本学会が十分対応できていないのではないかという懸念があった。それは機関会員数の減少、富士研への研修病院参加数の減少などにも表れていた。19・20期では、機関会員のメリットを訴え、卒後・専門教育委員会、指導医能力開発検討委員会などを組織して課題解決の方策を探るとともに、7回にわたって臨床研修に関する総説を機関誌に連載した⁴⁾。21期では教育病院委員会、専門医教育委員会など、より具体的な形で活動が始まっており成果に期待したい。

若手育成と研究活性化

2000年代以降、各医学部に医学教育ユニットが設立され、様々な医療職教育の分野でも教育に関心を持つ教員が本学会に入会するようになった。学会の将来を担う若手会員の成長にとって、教育に関する研究的取り組みが不可欠と考え、医学教育研究技法ワークショップやメンタリング・プログラムなど、若手の研究支援に取り組み⁵⁾、大会演題数、医学教育への論文投稿数、懸田賞推薦者数などが増加しつつある。また、将来構想に関する若手ワーキンググループを組織し、自由な発想で学会の将来を考えていただいたことも若手育成に繋がったと考えている⁶⁾。

COVID-19 パンデミックの影響

COVID-19 パンデミックは本学会の活動にも深刻な影響を及ぼした。医療現場での臨床実習が困難となり、ウェブ授業が当たり前となり、

ICTを利用した教育が一気に加速した。本学会ではサイバーシンポジウムを4回にわたり開催し⁷⁾、機関誌でも2020年6月の緊急特集⁸⁾を皮切りに3回にわたり特集が組まれ、情報交換・教育支援・研究開発などに資する事ができた。学術大会の運営も大きな影響を受けたが、第52回大会（鹿児島大学）、第53回大会（自治医科大学）は、主催校の懸命なご努力によって新たなスタイルで開催することができた。ここに深く感謝申し上げたい。各種委員会活動・理事会もウェブ開催が主体となったが、地方からの参加が容易になる、旅費等の経費を有効活用できる、などのメリットもある。今後はICTの利点・欠点を吟味しながら次世代の教育を開発する必要がある、若手会員の一層の活躍を期待したい。

医学部不正入試問題

2018年夏に発覚した医学部不正入試問題は、広く社会から批判を浴びることとなり、本学会も、公正で透明性の高い入学者選抜を各大学に求める理事長声明を発出した。今回は性別と年齢に関する恣意的な選抜が主な問題であったが、essential workerである医療者の育成は一種の社会事業である。海外ではwidening participationなど幅広い視点からどのような人材を選抜し育成すべきかの議論が行われており⁹⁾、今後、わが国でも基本に立ち返った議論が必要であろう。

選挙制度改革と多様性の推進

2020年度に行われた21・22期の代議員・理事選挙は初の電子投票システムで実施された。また、選挙理事20名のうち5名以上を女性理事、5名以上を医療機関等理事とする役員規則の改正が行われ、代議員にも多様な医療職種の指導者が選出された。本学会には医師だけでなく多様な会員が参画しており、より良い教育のためにさらに協働していくことが望まれる。

終わりに

19期冒頭の理事長挨拶で「すべての医療者が教育的姿勢を持つ」ことをめざすと述べたが、4年間を振り返ると、道半ばの感が強い。本学

会の情報発信力を高め、より多くの医療教育関係者に関心を持っていただくための継続的努力が切望される。この振り返りが今後の学会活動の参考になれば幸いである。

■文 献

- 1) 特集：日本医学教育学会 50 周年記念. 医学教育 2018 ; **49** (5) : 397-452.
- 2) 第 46 回医学教育者のためのワークショップ（富士研ワークショップ）の記録（第 1 報）. 医学教育 2020 ; **51** (1) : 49-62.
- 3) 特集：医学教育における国際協力. 医学教育 2018 ; **49** (4) : 275-331.
- 4) 総説シリーズ：初期臨床研修と医学教育（第 7 回）シリーズの振り返りと今後の展望. 医学教育 2018 ; **49** (5) : 453-9.
- 5) 特集：医学教育論文発表への道—研究計画から学会誌投稿まで. 医学教育 2018 ; **49** (1) : 1-21.
- 6) 委員会報告：将来構想若手ワーキング. 医学教育 2019 ; **50** (1) : 1-45.
- 7) 委員会報告：医学教育サイバーシンポジウム開催報告. 医学教育 2021 ; **52** (1) : 47-51.
- 8) 特集：パンデミック下の医学教育—現在進行形の実践報告—. 医学教育 2020 ; **51** (3) : 198-314.
- 9) Kumwenda B, Cleland J, Greatrix R, MacKenzie RK, Prescott G. Are efforts to attract graduate applicants to UK medical schools effective in increasing the participation of underrepresented socioeconomic groups? A national cohort. *BMJ Open* 2018 ; **8** : e018946.

第 6 部

日本医学教育学会大会